

生涯を地域の人々と共に

中北常子

開業助産婦(三重県伊勢市)

一日の仕事を終えて帰宅、一息つこうと椅子に座った途端に電話のベルが鳴りました。受話器の向こうからは、綺麗に澄みきった澤村節子さんのお声。お仕事に限らず、舞踊や歌などなんでもおできになり、そしてわたしたち助産婦仲間を、機知に富んだ発想でいつもリードしてくださるリーダー的存在の方です。

お電話の内容は、この「りれ一随筆」のバトンを引き継いで欲しいというものでした。わたしには無理なことと思いましたが、お断りすることもちゅうちょされ結局はお引き受けしました。これを好機とし、助産婦としての我が人生を振り返り、このような仲間もいることを皆さまにお伝えできたら幸いです。

助産婦養成所時代の思い出

養成所に入学して間もない頃のできごとです。仲良しだった級友と散歩にでかけ、道端に咲くレンゲ草を思い思いに摘んで宿舍へと帰りました。途中で病院脇の道を通りかかった際、入院していらっしゃる患者さんを見かけ、先ほど摘んだ花を垣根越しに手渡しました。その方はとても喜んでくださり、わたしたちも満足して寄宿舎の玄関に入った途端目にしたのは舎監さんの怖い顔でした。

いまの時代には想像もできないことですが、花を渡した患者さんが海軍の軍人さんだったことが、舎監さんの怒りの原因でした。「看護婦ならんとする者が軍人の患者さんに花など差し出すのはけしからん」ということです。そして、罰としてしばらくの外出禁止を申し渡されたのでし

た。

現在となっては遠い昔の思い出です。でも当時の仲間が集まると、懐かしい笑い話として話題にしながら、平和が続くことを願っています。

第1子娩出から2日後に第2子が

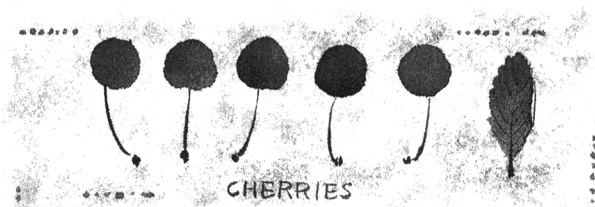
私は、昭和22年5月に日本助産婦会三重県支部の伊勢分会会員となり現在に至っています。開業して以来約50年ですが、その間は実にさまざまなことがございました。その中でもとりわけ印象に残っているのが開業間もない頃のことです。

開業以来7年間続けて双胎分娩を介助した経験があります。ある年の4月の例は本当に忘れることができません。その方は33歳の経産婦さんでした。妊娠経過は格別の異常もなく順調でした。

もしということもありますから、ご主人やお姑さんには病院分娩をすすめました。でも当時のことですから家庭分娩がほとんどですし、家族の希望も家庭で産ませたいというものでした。また嘱託医も、異常がありそうな場合はいつでも引き受けると言ってくれました。

ところが妊婦さん宅の隣のお婆さんがやって来て「あの嫁は33歳の厄年だし、お腹も大変に大きいから何かありそうだ、本当に大丈夫なのか」とうるさく問いただす始末です。

それからしばらく経った4月8日の早朝、陣痛発来との連絡がありました。出産そのものは順調に進行し、午後3時には第1子が骨盤位で無事に生まれました。その新生児の沐浴も終わり、いろいろな計測や処置を終え、お母さんの傍らに寝かせ、続いて第2子の娩出を待ちました。しかし陣



痛は途絶えたままで、産婦さんは第1子の泣き声を聞きながら泰然と食事などしています。

胎盤も娩出されていませんから、産婦さんの会陰部あたりには、第1子のものだった臍帯につけたコッヘル鉗子があります。そのコッヘル鉗子の下がり方から、第2子の下降を確認しようとしたのですが、全く降りてくる様子はありません。

医師に電話連絡をすると、清潔に注意してあとは待つしかないだろうとのお答えでした。その後は眠ることもできず、不安なままに丸1日が経過し、翌日は予定していた新生児の沐浴などもお断りし、ひとときも産婦さんの側を離れませんでした。

10日になり、やっと午前7時過ぎに軽い腹部緊張がみられ、コッヘルをつけたままの臍帯が10センチ程下降してきました。そして、午前9時に第2子も同じく骨盤位で無事に生まれました。

第1子娩出から第2子娩出までが約2日間と、驚くほどの長い時間を要しましたが、母子ともになんの異常もなく無事に分娩が終了しました。この時ほどホッとし、また感謝したことはありません。そして、重責を果たせた喜びをかみしめたものです。

人命救助で表彰されたことも

昭和40年頃から私の周囲でも入院分娩が増えてまいりました。そして、私の仕事内容も大きく変わり、現在では、退院後の保健指導などの訪問業務が主なものになっています。母乳トラブルや新生児の沐浴が中心の仕事です。臍帯をつけたま

ま退院してきたベビーの沐浴や臍処置、お母さんの乳房マッサージを行ない、また次の訪問先へと自転車を踏みながら、日々を忙しく送っております。

そんなある日のこと、沐浴からの帰り道の海岸通りをいつものように通りかかったところ「助けてー」との叫び声。あわてて自転車を降りて声の方を見ると、入水したのか、事故なのかは不明ですが年輩の女性が小舟に引き上げられているではありませんか。人工呼吸をする人もいない様子に、思わず小舟に飛び乗り人工呼吸を行ない、救急車が到着するまでの間をつなぎました。ようやく蘇生し、なんとか救急車に乗せるまでは本当に一生懸命でした。

その方が入院されている間は、何度もお見舞いに伺い、退院後はその方がわが家を幾度となく訪ねて来てくださいます。「生まれ変わったつもりで末永く生きていきます」という言葉とともに、複雑な家庭の事情を話され、その聞き役は現在に至っております。

後日、三重県警察本部長より人命救助の感謝状もいただきました。そして何よりも嬉しいことは、その方のご家族が大変に喜んでくださっていることです。

地域の中で、また助産婦としてさまざまなことがございましたが、老いの身に鞭打ちつつ日々を楽しみ、頑張ってもおります。続く限り現役でいたいものです。そして最後に、若い助産婦さんが1人でも多く開業してくださり、後輩が増えることを心から願っております。